

A 語句の意味と読み

(1) もうす（歴史的仮名遣いでは「まうす」）／★「-au」は「-おう」に直す。「臣亮言す」＝「家来の亮が申し上げます」で、上奏文の書き出しの決まり文句

(2) (天子が) お亡くなりになった。／★「崩」も「殂」も貴人の死を表す字。ふつうの人の死には使わない

(3) 大事なとき・重大な分かれめ。生き残るか滅びるかがかった局面。／★読みは「とき」。読みと意味をセットで問われる最頻出語

(4) 特別に手厚いもてなし・待遇。／先帝劉備が諸葛亮を特別に重く用いたことをいう

(5) わけ・理由。／★「それゆえ（だから）」と取りちがえない。「～する所以なり」＝「～する理由である」

(6) 官職のない庶民。無位無官の身。／もとは「麻などの粗末な衣服」の意味。そこから身分をいう語になった

(7) 涙を流して泣くこと。／「涕」も「泣」も、なみだ・泣くことを表す字

B 句法

(8) 再読文字。「いまだ～ず」と読み、「まだ～ない」の意。／★ここは「(大事業が) まだ半分も終わらないうちに」

(9) 二度目は「べし」と読む。「宜しく～すべし」＝「～するのがよい・当然～すべきだ」。／家来が君主にそうするよう勧める言い方

(10) 「～してはならない・～すべきでない」。「宜しく～べし」を打ち消した、禁止・不適當の言い方。(教科書によっては「～するのがよくない」と訳す。どちらでもよい。)／「～するのがよくない」と訳す教科書と「～してはならない」と訳す教科書がある。お使いの教科書の説明に合わせる

(11) 「～しようとする・～したいと思う」。願望・意志を表

す。／直前の動詞を未然形にして「ん(む)」を付けて読む

(12) 断定(判断)を表す。「～すればなり」の形で「～だからである」と理由を言い切る働き。／白文では「也」にあたる。文末の「也」＝「なり」は判断・断定

(13) 「けだし」と読む副詞で、「思うに・おそらく～だろう」と理由を推し量って述べる。文末の「～すればなり(＝～だからである)」と呼応している。／★「蓋し～ばなり」でひとまとまり。「～しているのは、思うに…だからである」という形になる

C 主語・指す内容

(14) 書いたのは諸葛亮(亮)。差し出した相手は蜀の皇帝劉禪(本文の「陛下」)。／「臣亮」の「亮」が作者自身の名

(15) 先帝＝劉備。／★先帝＝劉備、陛下＝劉禪。この二人の取りちがえが最大のミス

(16) 先帝から受けた特別な厚遇(⑥「殊遇」)。／直前の「先帝の殊遇を追ひて」を受けている

(17) 主語＝先帝(劉備)／「臣」＝諸葛亮自身。／★訪ねたのが劉備、訪ねられたのが諸葛亮。逆にすると意味が反対になる

D 口語訳

(18) 先帝は、(漢王朝を復興するという)大事業をまだ半分も成しとげないうちに、その途中で亡くなりました。

(19) いま天下は三つに分かれ、益州(蜀)は疲れ弱っている。これはまことに、生き残るか滅びるかの分かれめの時である。

(20) むやみにご自分を安く見て卑下し、(都合のよい)たとえを引いて道理を見失って、そうして忠義の諫言の道をふさいでしまわれてはならない。※「～ふさいでしまわれるのはよくない」と訳す教科書もある。

(21) すぐれた家来を親しく用いて、つまらない人間を遠ざけたこと、これこそが前漢が栄えた理由である。

E 内容・記述

(22) 天下が魏・呉・蜀の三国に分かれて対立している状態。(そのなかで蜀＝益州は疲弊している。)

(23) 功のある者を引き立て、悪い者を罰し、善悪を正しく見きわめて賞罰を行うということ。しかもそれを宮中と丞相府とで差をつけず、同じ基準で公平に行うべきだという方針。／「陟」＝ひきあげる、「罰」＝罰する、「臧否」＝善と悪。現代仮名遣いでは「ちよくばつぞうひ」

(24) 王朝の興亡は人材の登用しだから、賢臣を近づけ小人を遠ざけよということ。(三十七字)

(25) 先帝の恩に報い漢室を復興するという決意と、都を離れる万感の思い。(三十二字)／涕泣＝涙を流して泣くこと。直前まで先帝への恩と北伐の決意を述べているので、答えの軸は「先帝への恩」＋「都を離れる思い」

F 文学史・故事

(26) すいしのへう（現代仮名遣いでは「すいしのひょう」）／「表」は家来が君主にたてまつる文書＝上奏文。「出師」は軍を出すこと。／『文選（もんぜん）』に収められた名文。のちに書かれたとされる『後出師表』と区別して『前出師表』とも呼ばれる

(27) 三顧の礼／目上の人が礼をつくして、くり返し人を訪ね、協力を求めること。

(28) 字は孔明／蜀（蜀漢）。／魏を討つ北伐に出発するにあたり、皇帝劉禅にたてまつった上奏文とされる

【現代語訳（全文）】

家来の亮（諸葛亮）が申し上げます。先帝（劉備）は、漢王朝を復興するという大事業をまだ半分も成しとげないうちに、その途中でお亡くなりになりました。いま天下は魏・呉・蜀の三つに分かれ、わが蜀の益州は疲れ弱っています。これはまことに、生き残るか滅びるかの分かれめの時です。それでも、宮中の護衛の家来が職務を怠らず、忠義の志をもつ武士がわが身をかえりみず外で戦っているのは、思うに、先帝から受けた特別な厚遇を心に思い、その恩に陛下（劉禅）に報いようとしているからなのです。

ぜひとも、お耳を広く開いて家来の言葉をお聞きになり、そうして先帝の残された徳を輝かせ、志ある人々の気持ちを大きく奮い立たせるのがよろしい。むやみにご自分を安く見て卑下し、（都合のよい）たとえを引いて道理を見失って、忠義の諫言の道をふさいでしまわれてはなりません。宮中と丞相府とは、ともに一体です。功のある者を引き立て、悪い者を罰し、善悪を見きわめるにあたって、（宮中と府中とで）差があってはなりません。

すぐれた家来を親しく用いて、つまらない人間を遠ざけたこと、これこそが前漢が栄えた理由です。反対に、つまらない人間を親しく用いて、すぐれた家来を遠ざけたこと、これこそが後漢が傾き衰えた理由なのです。

私はもともと官職もない一介の庶民で、南陽の地で自分の手で田畑を耕し、せめてこの乱れた世の中で何とか生き延びられればよいと思い、諸侯に名を知られ出世しようなどは求めていませんでした。ところが先帝は、私の身分が低いやしいことを気になさらず、ご自分から腰を低くして、三度も私の粗末な草ぶきの家を訪ねてくださり、今の世の中のことについて私にご相談くださいました。私はこのことに深く感激し、とうとう先帝のために、馬を駆って働き尽くすことをお約束したのです。

いま、遠く都を離れて出陣するにあたり、この上奏文を前にして涙があふれて泣くばかりで、自分でも何を申し上げているのか分からないほどです。